

# 〔11〕 オペラ＝バスティーユに思う

1991年5月3日 東京新聞 夕刊

長らくフランスのオペラとバレエの殿堂であったパリ・オペラ座に対して、七月革命ゆかりのバスティーユ広場に、もう一つのオペラ座、オペラバスティーユが作られ、こちらがオペラ専門、旧オペラ座のほうはオペラリガルニエとしてバレエ専門の劇場になった。

オペラバスティーユは、かつてない大規模な劇場建築ということ、一九八三年に七五〇の参加によって国際的な建築コンペティションが始まって以来、前評判がかまびすしかったものだが、最終審査で選ばれたのは、ウルグアイ出身のカナダ人カルロス・オットという三八歳でいまだ無名の建築家の計画案だった。

## ● 可動する代舞台

この新オペラ劇場を作るに際しての目的のひとつは、従来の限定された観客層から、より開かれた一般大衆へとオペラを解放するというものだった。しかし客席数二千七百と聞いたところでは、旧オペラ座の二千、私たちに馴染み深い東京文化会館の二千三百と比べて、そう驚くにも値しないように思われる。ニューヨークのメトロポリタン歌劇場はすでに三千八百という収容能力を持っているのだ。

だがオペラバスティーユにおいて、じつは客席はもっとも小規模におさえられた部分なのである。作品の視聴覚的な質を確保するには、これ以上客席を大きくすることはできないという判断の上で、ではどのようなにして多くの観客の受け入れが可能になるか。その解答として出されたのが、通常の舞台の間口の三倍、奥行き三倍、それを二層に重ねた舞台空間だった。つまり、中心の本舞台に対して、可動の代舞台とでもいべきものを両脇や背後、上方に配置し、これをエレベーターで移動させるのである。代舞台の上には、目下上演中の全幕の装置のみならず、次に予定されている三ないし四作品の装置を、あらかじめ準備することができるし、リハーサルもまた完璧に行うことができる。

こうしてオペラバスティーユは、仕込みと称する準

# 〔11〕 オペラ＝バスティーユに思う

1991年5月3日 東京新聞 夕刊

備期間を取らずに、大掛かりなオペラを上演することが可能になり、同時に一回の観劇料を低くおさえることができるようになった。というのも、通常オペラのチケット代には、仕込みやりハーサルのための劇場使用料など、準備にかかる経費が大幅に含まれているからである。

## ● 最良の選択

『オペラ座バスティーユ』という本には、この建築の全貌をつたえる多くの写真や図面が収められているが、最も感動的なのは、広大な舞台空間の一番奥から舞台正面の額縁を通して客席を写した一枚である。その客席の、なんと小さく見えることか。つまり観客は、万全の準備によって練り上げられた舞台芸術の、最良の部分を、最良の条件で楽しむというわけだ。これこそは、オペラのみならずすべての舞台人の夢と言えるだろう。

かつてオペラは貴族階級を中心とする一部のエリート の娯楽だった。最高級の芸術が上演されていたことは言うまでもないが、それよりもなおオペラ座は上流サロンの出店、いや社交界そのものだったのだ。個室のように仕切られた棧敷席は名流人士の貸し切りで、人々は舞台の演技を楽しむのと同じくらい、公爵夫人や伯爵夫人のベストドレッシングぶり、またその交流のさまを見物した。

二十世紀初頭のパリ社交界を描いたブルーストの『失われた時を求めて』には、オペラ座の平土間の席はいくらかは前売所でも売られていて、スノップや卑俗な連中、学生などが来ているが、彼らは日頃なれない場に身を置いた緊張から、せつかくの芸術もゆとりをもって観賞することができない、とある。この件りを讀んだとき、私はちよつと悲しかったものだ。

そうした伝統的な雰囲気は、現在のオペラガルニエにはまだ残っていて、幕間、シャンパンのグラスを手にも口にも行き交う着飾った人々は、豪華な内部装飾

# 〔11〕 オペラ＝バスティーユに思う

1991年5月3日 東京新聞 夕刊

とシャンテリアの光にはえて、しばし舞台をも忘れさせるほど華やかである。

ではオペラ＝バスティーユのほうはどうだろうか。ガラス張りの円形の建物は、その外観も内部空間も、どこか成田やシャルル・ドゴールといった近代的な国際空港を思わせる。客席は、全席が正面を向いた開かれた空間で、旧オペラ座のあの丸天井につつまれた閉鎖的な雰囲気、ブルーストが海底の王国になぞらえたあの趣とは、まったく違う。

## ● 何だか図書館

だが、こうして貴族のお楽しみから公開されたオペラが、本当に一般大衆の肌になれるものになったかといえ、かたらずしもそうとは言いきれないものがあるように、私は感じた。

ほとんど非人間的なほどに大きなスケールで整えられた物質的条件、それが芸術本来の人間的な匂いを稀薄にさせてはいないだろうか。これは要するにオペラの国立図書館ということだ、『フィガロの結婚』を観ながら、私はそう考えていた。音響はすばらしい。また歌手の技法にも文句はないのだが、しかし装飾の少ない、ほとんど抽象的な装置と、長い影をひく暗い照明のなかで、凝固したような歌い手の声はあまりにアカデミックで、時に宗教的でさえある。モーツアルトの輝き、あの天使のとき猥雑さは、いったいどこに隠れてしまったのだろうか。

そして幕間、人々は生真面目な顔で演出や表現の意図について議論しているのである。まるで皆が皆、評論家が研究者でもあるかのように。

過去の歴史を見ても、偉大な芸術はたしかに権力の保護や支援を必要とする。それによって大成もし、磨かれもする。しかし、巨大な機構に組み込まれることで失うものもまた、あるのではあるまいか。そのことを良いとも悪いとも言えないで、私自身はいるのだけども。

# 〔11〕 オペラニバスティーユに思ふ

1991年5月3日 東京新聞 夕刊